

茨城高等学校・中学校

校長室だより

2025年3月7日

この文章は、茨城高校生徒会誌『轟（とどろき）』16号（令和7年3月1日発行）に寄稿したものです。中学生にも読んでほしいと思い、「校長室だより」でも改めて配信します。長い文章ですが、じっくり読んでみてください。

学校ってナンダ？！

学校や教育は、社会の中で常に高い関心を集めるテーマです。書店の書棚には、常に学校、教育に関連する本が何種類も並んでいます。学校で何か問題が起こると、ニュース番組などに教育関係に詳しいコメンテーターが登場してさまざまな意見を述べたりします。専門家だけでなく、教育についての専門的知識があまり豊富ではないであろうタレントや一般市民の声が取り上げられることもあります。教育問題は他のテーマとくらべて、個人が自由に意見を述べる場面が比較的多く見られる気がします。誰もが子ども時代に学校という場所で学んだ経験があり、自分なりの学校観や教育観を持っているということなのでしょう。

こうして、社会にはさまざまな学校観、教育観が存在することになります。子どもは自主性を重んじてのびのび育てるべきだという教育観もあれば、激動する世界の中で生きていくにはしっかりした知識やスキルを身につけさせなければならないとする教育観もあります。よい高校、よい大学に進学するための学力を養うことが重要だという考えもあれば、部活動を通して精神力を鍛え人間関係を学ぶことが大切だとする考えもあります。

自分はこれまで40年近く、学校を職場として、教師を職業として生きてきました。その中で、おそらく他業種の人たちよりも、学校や教育について考える経験をしてきました。その中には、ずっと一貫して変わらないものも、時とともに変化していったものもあります。今回、生徒会誌『轟』に寄稿するにあたり、学校や教育について自分の考えているあれこれを、完成形の結論としてではなく、問題提起として書いてみたいと考えました。

また、その際に、論旨が一方的な思い込みに偏らないように、二冊の本を参考にすることにしました。一冊は広田照幸著『学校はなぜ退屈でなぜ大切なのか』（ちくまプリマー新書）、もう一冊はおおたとしまさ著『学校に染まるな！／バカとルールの無限増殖』（ちくまプリマー新書）です。広田さんは現在、大学で教育学を教えている研究者で、おおたさんは学校関係の豊富な取材経験を持つ教育ジャーナリストです。この二冊を選んだのは、一方は学校に肯定的なタイトル、もう一方は学校に否定的なタイトルで、両方の立場からの意見を参考にしてみたいと思ったからです。（ちなみにけっこう純粋にタイトルだけで選んだので、読んでみて「あれ？」というような箇所も多々ありました。）

それでは「学校ってナンダ？」問題について、一緒に考えていきましょう！

1 授業ってナンダ？

「学校といたら、思い浮かべるものは何？」という質問に対して、その回答の上位にランクインすることが予想されるのが「授業」でしょう。学校とは日常的に授業を行う場所であり、授業のない学校は想像できません。それでは私たちが毎日関わっている授業とは何なのでしょう？

『学校はなぜ退屈で…』の中で広田さんは、学校で学んで身につける知識（＝学校知）と、個人が経験の中で学ぶ知識を対比しています。世の中には、学校で勉強したことなど現実の社会では役に立たない、社会に出て経験の中で学ぶことが大切だ、というような考え方もあります。これに対して広田さんは、「いや、学校で学ぶ知識はやっぱり大切だ」という立場をとります。

学校という制度が整備されていなかった時代、子どもたちは普段の生活の中で、周囲の大人と一緒に生活することで様々なことを学んでいました。羊飼いの子であれ、農民の子であれ、大人と一緒に暮らし、仕事を手伝い、雑談の輪に入ること、生活に必要なさまざまな知識を得ることができたのです。人間の長い歴史のほとんどは、これで何とかなってきました。羊飼いの子は、将来羊飼いに、農民の子は農民になるという社会ではこれで十分だったのです。

しかし、社会が発展すると、このやり方は通用しなくなっていきます。複雑化した社会では、たとえば何かの契約をするとか、遠くの世界とコミュニケーションするとか、外の世界から新たなルールが持ち込まれるとか、日常の身近な関係の中だけの学習では対処できなくなっていきます。子どもたちは、それまで知らなかった新しい知識を身につけないと、将来仕事にありつけなくなってしまうのです。

そこで必要となってくるのが「カリキュラム化された知」です。「カリキュラム化された知」について、広田さんは、「この世界を再構築して縮約（しゅくやく）^{しゅくやく}縮約したもの」だと説明しています。少し言葉が難しいので解説すると、例えば、私たちはフランス革命を直接に経験することはできません。また、フランス革命の全貌を余さず理解することも困難でしょう。しかし、言葉を通して「1789年7月14日、パリ市民がバスチユ監獄を襲撃、陥落させてフランス革命が起こった」という知識を得ることはできます。そこではフランス革命につながった啓蒙思想の浸透、国家財政破綻と特権階級への課税要求、国王ルイ 16 世による財務総監の罷免（ひめん）^{ひめん}、軍隊によるパリ制圧風評パニックなどの詳細な経緯は圧縮され、省略されています。しかし、フランス革命という事実の核心は、言葉によって再構成され、受け渡しが可能な「知」となったのです。

「生まれ育った身の回りの世界を越えて、広い世界で生きていくためには、子どもたちは、言葉や記号を通して、この世界がどういうものなのかを理解しないといけない。学校で教えられるのはそういう知なのです。だから、学校知は、いわば記号化された“世界の縮図”だといえるのです」という広田さんの主張は、自分にとって非常に納得できるものでした。さらに広田さんは、「多くの子どもたちに“勉強がつまらない”というふうに映るのは、学校の知の本質です。…中略…身近な日常生活とは切り離されたものを教わっているのですから仕方ありません」とも述べています。

『学校に染まるな！…』のおおたさんも、学校の勉強や授業が大切だという立場をとっている点は同じです。面白いなあと思ったのは、「教科書はフリーズドライ、先生はお湯」という話です。おおたさんは、「長い年月をかけて人類が構築してきた知識体系を現代の子どもたちにも食べやすいように小分けにしたものが教科書」だと述べています。この考え方は、広田さんの「カリキュラム化された学校知」に似ていますね。しかし、だからこそ教科書の内容はシンプルで無味乾燥な

ものになりがちです。「大河ドラマなんかで一年をかけて毎週描かれる人間模様が、教科書の中では場合によっては数行で描かれておしまい」なわけです。そんなフリーズドライ化された知識に、お湯をかけてみずみずしさを取り戻し、おいしく食べられるようにするのが教師の役割だ、と書かれていて、うまい例えだなあと感心しました。

一方で、おおたさんは、「学校は学びをつまらなくさせる装置」であると述べています。私たちは本能として「知りたい」という欲求を持っている。本能に従って、調べ、考え、学ぶことは楽しい。しかし、勉強とは読んで字のごとく「強いて勉める」ことであり、強制力が働く。その強制力を絶対的に働かせる装置が学校であり、学校は宿命的に「学びをつまらなくさせる」宿命を背負っている、というのです。

そして、そんなつまらない勉強を面白くさせるのが教師の「教科愛」だとも、おおたさんはいます。「先生たちというのはもともと英語が好きだとか数学の世界に惚れ込んだとか、教科の魅力を誰よりも理解しているひとたちです。その教科愛をストレートに生徒たちにぶつけて、数学的観点から見える世界の美しさを、理科的観点から見える世界の不思議さを、歴史的観点から見える世界の面白さを、滔々(とうとう)滔々(とうとう)と語ってくれたら、生徒たちだって時間が経つのを忘れて聞き入るはずですよ」と書いています。

自分は40年近く国語教師として教壇に立ってきました。もしもおおたさんに「もちろん、国語に惚れ込んで、生徒たちに国語愛を伝えるために国語教師になったんですね?!」と詰められたら、「えっ、うん。まあ……そうかな?」とか答えてしまいそうです。もちろん国語という教科も、授業で教えることも好きだけれど、生徒に滔々と語れる国語愛があるか、と言われると正直自信がありません。それ以前に、例えば授業のたびに毎時間、教師から教科愛を語り聞かされていたら、生徒の方もたまらないんじゃないかな?と自分は思います。

教師にとって一番大切な仕事は授業だ、と自分は思っています。教師はその教科を教える専門家でありプロフェッショナルであるからです。しかし、授業は単発の講演などとは違い、日々繰り返されるものです。それを「教科愛」だけで乗り切るのは、どうしても限界があると思います。

よい授業を行うためには、まず、丁寧に教材を研究して、その1時間でどんな授業をするのか、教師は何を説明し、生徒はどんな活動をするのかを綿密に計画することが必要です。授業の成否の90%は、このような事前の準備にかかっています。そして、教師自身が授業を楽しむこと。教師が授業を楽しみと思えなかったら、授業を受けている生徒が楽しいはずはありません。生徒からすれば、授業を楽しみと思えることが知識の獲得や理解の深まりの第一歩です。筆者はいつも教室に入るとき、「ようし、この授業を自分史上最高の授業にするぞ!」と自分に言い聞かせていました。授業の中で何回笑いが取れるかにもこだわりました。辛い気持ちで覚えた知識よりも、楽しく笑って覚えた知識の方が絶対に定着すると思いませんか?確かに、おおたさんの言うように、学校には学びをつまらなくさせる働きもある。しかし同時に学校は、勉強の面白さを気づかせる場所でもあると思うのです。その、勉強の楽しさを気づかせるための基本の基本が授業なのではないかな?というのが、経験から得た自分の考えです。

2 校則ってナンダ?

ちょっと前、メディアに校則の話題が盛んに取り上げられていた時期がありました。いわゆるブラック校則と呼ばれる、社会常識から見て「なんじゃこりゃ?」と思えるような理不尽な校則が指

摘され、学校の持つ古い体質が批判の対象となっていました。ブラック校則に限らず、校則についての議論は学校の内外で、昔から絶えることなく続いています。この章では、校則について考えてみたいと思います。

1980年代、校内暴力の嵐が学校を襲いました。当時、大人気だったある学園ドラマでは、校内暴力に走る不良生徒と彼らを力で押さえつけようとする学校、そんな学校の方針に異を唱え生徒たちに寄り添う熱血教師の活躍が描かれ、結果として校内暴力が全国に拡散するきっかけとなったと自分は考えています。当時、後を絶たない校内暴力に対処するため、多くの学校がとった手段が管理教育でした。前髪と眉の距離やスカート丈をcm、mm単位で規定したり、靴下の色やワンポイントまで細かく制限したり、部活動への加入を全生徒に強制したり、下着の色まで規定したりという校則がこの時期に誕生し、何十年も見直されないまま運用が続いてきたのが、今になって問題視されているのです。

『学校に染まるな…』の中で、おおたさんは校則についてかなり辛辣(しんらつ^{しんらつ})な批判を展開しています。学校では、一般社会ならば選べる自由がことごとく制限されていて、それが当然だと思われる。学校は、世の中は思い通りにならないんだよ、自分で選べると思ったら大間違いだよ、という「あきらめのメンタリティ」を刷り込むための装置となっている。自分で選ぶことの喜び、難しさ、責任を経験せず、思考停止に陥った大衆には、民主主義なんて運営できない。自分で考えられないから誰かエライ人がルールを決めてくれるのを望むようになる。ルールが増えれば、ますます自分の頭で考えなくなるバカが増え、バカが増えればルールが作られるという「バカとルールの無限増殖ループ」が発生する、というのがおおたさんの主張です。

教師として長年の間、生徒に「ちゃんと校則を守りなさい」と指導してきた身としてはなかなか耳が痛いのですが、おおたさんの指摘に納得できる部分も少なからずあります。ルールで縛られることに疑いを持たなくなった子どもたちは、自分の頭で考えることをしなくなる、その結果として社会全体が思考停止に陥り、民主主義が機能しなくなるという指摘は、そのとおりだと思います。しかし、学校側の人間として言われっ放しもちよっと悔しいので、ささやかな反論を試みてみたいと思います。

まず、学校だけでなく、どんな組織や社会にも「規則」は存在します。規則そのものを否定したら、社会はアナキズム(無政府主義)に陥ってしまうのではないかと、一般社会の中でもすべての自由が認められるわけではなく、子どもたちが将来自立した市民生活を送るうえで、ルールや規則の制限の中でどうふるまったらいいか教えることも大切ではないか、という点を提起したいと思います。もちろんブラック校則のような、誰が見てもおかしいと思うような校則の見直しは必要だし、それについて教師や生徒、保護者や社会が考える機会を持つことは大事です。しかし、学校が学びの場である以上、そして様々な価値観を持った大勢の生徒たちがともに生活する場である以上、それらの環境を保障する一定の秩序は必要だと自分は考えています。

また、おおたさんは、校則イコール思考停止した子どもを大量に生み出す原因、と述べていますが、少なくとも自分が関わった、校則の制限の中でも学校生活を前向きに送りながら、豊かな批判精神を育み、卒業していった生徒たちは数えきれません。生徒たちの問題意識を喚起し、批判精神を育てる対象は校則問題に限らないということではないでしょうか。

一例をあげるなら、学校生活では制服を着用しなければならない、というのはほとんどの中学校、高校が定める校則で、生徒たちの多くは、その制限を疑うことなく受け入れています。この状態を「思考停止」と呼ぶべきでしょうか？多くの学校で制服着用の校則が廃止とならない理由に、

日本の中学、高校の多くが制服着用のルールを長年にわたって採用し、それがすでに一つの文化として根付いている点があると思います。このような、校則と文化、校則と社会の関係も丁寧に見ていく必要があるのではないかと思います。

以前、自分の担当する学年で、何度指導しても学校にメイクをして来る女子生徒がいました。あるとき少しキツめに注意をしたら、「なぜ、大人の女性はメイクをするのがマナーなのに、高校生はしちゃいけないんですか？理由が説明できないなら、メイクを禁止するのはおかしいです」と逆襲されてしまいました。メイクをしても誰にも迷惑をかけていないではないか、とも彼女は言うていました。そこで自分は彼女に「じゃあ、君は高校生がタトゥーを入れることについてどう思う？」と問い返しました。「もちろん、メイクとタトゥーは違うけれど、法律で禁止されていない点や、誰にも迷惑をかけていないという点については同じだよな？」。そこで彼女がどう答えたのかは残念ながら忘れてしまいましたが、この後自分は次のように話をした覚えがあります。

例えば、数学や物理のような自然科学の分野では、ある一つの考えに対して、なぜそのような解が導けるのか証明ができる。しかし、なぜ民主主義は大切なのか、環境問題と経済問題ではどちらを優先すべきなのか、といった社会科学の問題については、自然科学のように証明することはできない。人文知とは、「私は〇〇と考える」という一人称の知見だ。そして、その考えが独善に陥らないための基準が社会通念だと思う。社会通念は、その社会を構成する人々の価値観によって形成される。他人の物を盗んではいけない、暴力を交渉の手段としてはいけないなどのルールも、突き詰めると、それが良いか悪いかという、ひとり一人の価値観に行き当たる。未成年がタトゥーを入れることも、高校生がメイクをすることも、社会通念上、それがどう評価できるかをふまえて議論されるべきではないかな？と、そんなことを言った気がします。今考えると、ちょっと意地悪だったなあ。

学校や教師は、こんな生徒を育てたい、生徒たちにこんな社会を実現してもらいたい、という思いで教育を行います。その思いが、それぞれの学校の「目標」「方針」となり、カリキュラムに反映されていきます。だとしたら、校則もそうしたカリキュラムの一部であるというふうには考えられないでしょうか？行きすぎた校則に問題があるのはもちろんです。民主主義の基本は対話にあります。社会通念や人権に照らして問題だと考えられる校則は、学校の内外で議論されるべきです。そしてその議論は、校則だけを切り取って論じられるのではなく、そもそも学校はどうあるべきか、という広い視野に立った議論であるべきだと思うのです。

3 不登校といじめについて

現在、日本の学校が抱える大きな課題が、不登校といじめです。

文科省が2023年に行った調査では、不登校の状態にある小学生の数は13万370人で10年前の5倍、中学生は21万6112人で10年前の2.2倍、高校生も6万8770人で3年連続の増加、とあります。これほど膨大な数の子どもたちが学校に通っていない(通えていない)背景にはどんな事情があるのでしょうか？

『学校はなぜ退屈で…』で広田さんは、子どもたちが学ぶ場所は学校だけではない、と述べています。子どもたちは、家庭で親から学びます。親が直接何かを教えるだけでなく、親の様子を見たり、親と話をして学ぶことも多いでしょう。学校や地域で、友達と遊びながら学ぶことも、テレ

ビや漫画、アニメやゲームから学ぶこともあります。本を読むことは、学校の授業以上に様々なことを子どもたちに教えてくれるかも知れません。広田さんは、このような議論を推し進めていくと「学校不要論」のような議論が登場する、といいます。今はインターネットでいろいろな情報を手に入れられるし、特にコロナ禍以降、オンライン授業が一般化したり、YouTubeなどで勉強を教えてくれる無料動画も増えました。中学生の不登校ユーチューバーが「学校には行きません」と宣言し、話題になったことも記憶に新しいと思います。しかし、広田さんは、「学校は不要だ」とは思わないし、学校でしか学べないものがたくさんある、「学校に行かない」という選択には様々な不利益があり、おすすめしない、と書いています。

『学校に染まるな…』では、不登校に直接的に言及している部分は少ないのですが(注)、学校という環境そのものが合わない人には、フリースクールや学びの多様化学校、通信制高校などの選択肢があり、一般的な学校には強いストレスを感じる子どもたちでものびのび通える、と紹介しています。おおたさんは「必ずしも学校に通わなくてもいいじゃんと思っています」とも書いています。

ひと言で不登校といっても、全く学校に通えなくなるのか、週に何日かは登校できるのか、あるいはある特定の授業なら受けられるのか、など様々なグラデーションがあります。また、学校に通いづらくなる理由や原因も人それぞれです。なぜ登校できないのか、本人にも分からないというケースも珍しくありません。十年前、二十年前と比べて現在は「どうしても学校がストレスなら、無理をして学校に通わなくてもいい」という風潮が一般化しています。学校に行かなければと思っ

ていても登校できない苦しみを抱える子どもたちにとって、それは悪いことではないと思います。おおたさんが紹介するようなさまざまな選択肢が増えていることも助けになると思います。一方で、広田さんの言う「学校でしか学べないもの」がたくさんある、というのも事実です。それは、1で述べた授業で得られる知識や勉強の楽しさだったり、集団生活の中での人間関係だったりします。特に、学校という同程度の年齢の子どもたちが一緒に生活する集団の中で、気の置けない友人との時間を楽しんだり、クラスや部活動の仲間と友情や信頼を深めたり、また人間関係の理不尽さを経験したりすることも、将来、現実社会を生きていくうえで大切な学びといえます。不登校にはこうした学びの機会を失わせるデメリットがあるのです。

学校や教師が、不登校生徒に支援できることは限定的です。登校したくてもできずに苦しむ生徒に対して「こうするのがいいよ」という正解を示すことは非常に難しい。ひとつ言えるのは、不登校の生徒たちを支えるために、教師が「先生は君のことを気に掛けているよ」というメッセージを出し続けること、そして細く長くで良いから学校との関係性を途絶えさせないことが大切だということです。さまざまな理由や背景があり、一人ひとり異なる不登校に対処していくには、学校単独の取り組みだけでは十分ではありません。保護者や仲の良い友だち、カウンセラーやソーシャルワーカーといった専門的知見を持つ人たちと協力しながら、ひとりでも多くの不登校生徒が学校に通える喜びを実現することが、現在、学校に求められる使命だといえるでしょう。

もう一つの課題、いじめ問題に話を進めます。これもデータから紹介すると、2024年の文科省の調査では、いじめの認知件数は732,568件で、前年比50,620件増となっています。学校種別では、小学校588,930件、中学校122,703件、高校17,611件などです。いじめ認知件数の推移を見ると、2000年代は10,000件未満、2010年代でも20,000件未満で推移していた認知件数が、2015年に初めて20,000件を超え、それ以降急カーブを描いて増加していることが分かりま

す。マスメディアがこれを「いじめ急拡大」などとセンセーショナルな取り上げ方をするのを目にすることがあります。しかし、実はこれには理由があります。「いじめの定義」が 2015 年に変わったからです。

現在の「いじめ防止対策推進法」は 2015 年に成立しました。この法律では、いじめを「児童等に対して、当該児童等が在籍する学校に在籍している等当該児童等と一定の人間関係にある他の児童等が行う心理的又は物理的な影響を与える行為（インターネットを通じて行われるものも含む。）であって、当該行為の対象となった児童等が心身の苦痛を感じているもの」と定義づけています。難しい言葉が並んでいますが、要は「ある生徒が、誰か他の生徒が行った行為によって、精神的や肉体的に苦痛を感じたら、その行為はいじめです。インターネット上の行為も含まれます」ということです。いじめが「本人がいじめを受けたと感じる」ことを基準として判断されるようになり、いじめの認知件数はうなぎ上りに上昇したのです。

文科省は、いじめ件数が増加していることは、それまで見過ごされてきたいじめにまで調査が及ぶようになったということで、悪いことではない、という見方をしています。学校現場としても、相談のあった多数のいじめ案件を調査する労力は大変だけれども、細かいいじめを見落とさず対応することで、重大ないじめを防止する効果が出ていると実感できます。

『学校はなぜ退屈で…』の広田さんは、「いじめを改善するよいアイディアは私にはない」としながらも、いじめられている子どもに対しては「学校時代の仲間集団は、長い人生を考えたら、ほんの一時的なものだよ。悲観的にならないで」「あなたをいじめるヤツ（あるいは仲間はずれにするヤツ）は、くだらないヤツだ。そんなくだらない人間のためにあなたが落ち込んだり、死んだりするのはもったいない」と言いたい、と書いており、自分もまったくその通りだと感じます。

一方で、「いじめ防止対策推進法」のもとでは、いじめる意図など全くない行為、一般常識としていじめとは言いがたい行為までが、「いじめ」と判断されるケースも生じます。極端な例を挙げれば、A さんが隣の席の B さんに話しかけようとした瞬間、B さんは何かの用事で、たまたまそのタイミングで席を立ってしまった。話しかけようとした A さんは B さんに無視されたと感じて精神的に傷ついた、というような場合、法令上、B さんの行為はいじめと判断される可能性があるのです。

学校は、もちろん法律に沿った対処を行う義務があります。他方、学校には公正を体現するという社会的な使命があると思います。ところが、上記のようなケースでは、法令上の判断と学校が果たすべき公正が矛盾をきたす可能性があります。このとき学校はどちらを優先すべきなのでしょう？ 学校が、A さんの訴えをいじめと認めた場合、それは同時に B さんはいじめの加害者と判断したことになります。文科省のガイドラインには、加害者へのいじめ認定の通知をおこなわない対応も可能とありますが、例えどのような方法をとろうとも、学校が B さんはいじめの加害者と位置づけた、という事実は動きません。それは、公正であるべき学校の本質をゆがめるおそれがある、と自分は考えています。もちろん学校は「法令上の決まりなのだから仕方がない」という立場をとることもできます。しかしそれは、学校が自ら考えることを止め、思考停止に陥ることにつながりはしないでしょうか？

いじめ問題は、何重もの意味で、悩ましい課題を学校に突きつけています。

4 イニシエーションとしての受験

次は、おそらく高校生諸君にとって関心が高いであろう、受験と学校の関係について。茨城高

等学校は進学校です。ほぼ 100 %の生徒が、卒業後の進路として4年制以上の大学を選択していきます。おそらく今この文章を読んでいる君も、卒業後は大学へ、と考えていることでしょう。そんな君に質問です。君はなぜ大学に行くのですか？

『学校に染まるな…』のおおたさんは、学校は、得られる人生が学力によって変わってしまうという思想を子どもたちに刷り込む巨大な装置として機能している、と述べています。義務教育だけでも9年間、高校まで入れると 12 年間、子どもたちはそういうメッセージを受け取り続け、18 歳時点での大学入試の結果によって社会的地位や収入が異なるのは当然だと思い込まされている、とiiいうのです。「そもそもなんで私たちは競わなければいけないのでしょうか？しかもなぜ学力で競わされなければいけないのでしょうか？」という問題提起はおそらく、受験制度そのもの、現代日本の学歴社会の根本を問う、本質的な問いです。

おおたさんは、君たちがテストのたびに一喜一憂する偏差値についても、以下のように書いています。偏差値は、ラーメン屋さんの行列と同じで、入りやすさを表すものでおいしさを表すものではない。おいしいかどうかも分からずにラーメン屋の列に並ぶように、偏差値信仰にはまった人は偏差値で学校を選んでしまう。テーマパークのお気に入りのアトラクションがガラガラだったらラッキーと思うように、自分の行きたい学校の偏差値が低いことは、本来喜ぶべきことなのだ、と。

『学校はなぜ退屈で…』は、学校は「選抜・配分機能」を持つと論じています。わかりやすく言うと、学校は社会の中で、子どもたちを選抜し、評価し、社会の中の異なるポジションに振り分けていく機能を果たしている、というのです。受験はまさに、学校が行う「選抜・配分」の典型といえるでしょう。

著者の広田さんは、学校の選抜・配分の機能はネガティブに捉えられることが多い。入試で失敗して強い挫折感を持つ生徒もたくさんいる。その一方で、学校が選抜・配分の機能はプラスの意味も持っている。「小作人の子どもは小作人」があたりまえだった戦前の社会で、勉強がよくできる貧しい農家の子が奨学金をもらったりして大学まで進学し、成功を収めたという話を聞く。これなどは、学校が選抜・配分の機能を果たしているからこそ、子どもは生まれ育った環境から抜け出して、広い世界に出ていくことができた例だ、と述べています。

おおたさんの指摘以外の部分でも、日本の受験制度が数多くの問題を抱えていることは間違いありません。偏差値の高い大学を卒業した学生が、現実社会の中で必ずしも有能だとは限らないということを、私たちはよく理解しています。しかし、学校が社会のなかで選抜・配分機能を果たし続ける以上、そして学歴にもとづく評価が日本社会に根強く存在する以上、受験を全面否定することは困難でしょう。中学生や高校生は、偏差値やテストの点数だけで評価されることに違和感を感じながら、受験を受け入れていくしかないのでしょうか？

この問題を前にしてひとつのヒントとなるのが、最初の質問ではないか、と自分は考えています。君はなぜ大学に行くのですか？もしも受験が、偏差値をあげるための知識の詰め込みに過ぎないとしたら、こんな空しい作業はありません。受験が君に与えてくれるものは限定的でしょう。しかし、受験の先に「なりたい自分」「学びたい何か」を思い描いて君が努力するとしたら、受験は目的ではなく手段となります。そのとき受験は、君を成長させてくれるフィールドとなるはずです。

自分は 40 年近い教員生活の中で、何百人、何千人の受験生と接してきました。その経験からいえるのは、目標を見定めた生徒、覚悟を決めた生徒には、自分を変える力が生まれる、ということです。迷いなく受験に向かう生徒は、本当に「いい顔」になります。甘えが消え、ひきしまった大人の顔になっていきます。受験は現代のイニシエーション(通過儀礼)だと言った人がいましたが、それは一面の真実をあらわしていると感じます。

受験はすべてではありません。受験で測れない価値もたくさんあります。しかし、受験は決して無意味ではありません。本気で取り組んだとき初めて見えてくるものがあります。そして学校には、生徒たちの受験を「意味あるもの」とするために導き、支える使命があるのだと思います。はなはだ月並みで恐縮ですが、このことばでこの章を閉じたいと思います。

5 学校ってナンダ？

ここまで、様々な角度から「学校ってナンダ？」問題を見てきましたが、そろそろ「それじゃ結局のところ、学校って何なのよ？」という声が聞こえてきそうです。最後に『学校はなぜ退屈で…』、『学校に染まるな…』の二冊から、その答えを探ってみたいと思います。

『学校はなぜ退屈で…』の最終章で、広田さんは「身の回りの世界とグローバルな世界」をテーマに話をしています。子どもたちが普段日常的に接している「身の回りの世界」で重要なものは、家族、友人、学校である。中でも家族と友人からの影響は飛び抜けて大きい。しかし、家族と友人との世界だけで学び、生きるのは狭い。子どもたちにとって、自由と可能性に富んだ、多様な進路や生き方を選択できることが大切だ。そうした可能性を与えるのが学校だ、と述べています。

広田さんの文章を引用します。「学校は広い世界へと通じる通路です。さまざまな仕事に通じる通路でもあり、主権者として広い世界を自分たちで維持したり変革したりする活動をうまくやれるようになるための通路でもあり、人類が作り上げてきたさまざまな文化を享受するために基本的なことを身につけるための通路でもあります。／しかし、学校自体は、ワクワクする体験をさせてくれるものに満ちた広い世界そのものではありません。あくまでも、学校は、世界全体をある角度からコンパクトに縮約した文字や記号ばかりがあふれている場にすぎないのです。／…中略…／だから、この学校という通路は、窮屈なほど狭く、退屈なほど殺風景な、長い廊下のような場所だと考えたらどうでしょうか。決して居心地がよい場所ではないけれど、でも、その廊下を通っていけば、廊下の先には扉があって、その先は、身近な世界を越えた、さまざまな生き方の可能性に満ちた、より広い世界につながっているのです」。

『学校に染まるな…』のおおたさんは、子どもたちは「青春体験」がないと頑張れない、学校は「青春体験」の場であることが大切だ、といいます。こちらもおおたさんの文章を引用します。「学校って勉強するだけの場所じゃないですよ。部活もあれば、行事もある。青春ドラマの舞台といえば、やっぱり学校です。／青春ドラマだったって、恋人同士がいちゃいちゃするリア充な話とは限りませんよ。全国大会を目指して部活に打ち込む青春もあるし、放課後の教室で気の置けない仲間たちと一見何の意味もなさそうな時間を過ごすのも青春です。／つまり、受験勉強の邪魔になりそうなものって、ぜんぶ青春です。学校は受験につながる勉強をするところでありながら、同時に受験を邪魔することをたくさん経験する場所でもあるんです。その両義性が学校の面白い

ところ。／たぶんそれが、人生なんです。受験勉強みたいにしくみとしては避けて通れないことと、青春のように一見なくてもよさそうなことと、その両方のサンドイッチで人生はおいしくなります」。

学校には青春体験が必要、というおたさんの意見にはとても共感できます。たまに卒業生が遊びに来て話をしたりすることがありますが、「高校時代、指数関数の勉強がめっちゃ楽しかったなあ」とか「俺、先生から関係詞を教わった授業、ずっと覚えてますよ」とかいう話にはまずなりません。授業の話が出るとしたら、授業内容以外の「先生って、予習してきてないときに限って、私のこと指すんですよ」的な話、そのほかに多いのは、文化祭や研修旅行、部活などの思い出話、「今だから言えるけど、あのとき〇〇したのは、実は××なんですよ～」といった暴露系の話などもけっこう多めです。(注：〇〇は、普通それをやったら教師に怒られる行為、××はその行為を行った人物。なぜか話をしている本人以外の場合がほとんど。)おたさんの文章を読みながら、ああ、こうした青春体験が彼らの今をどこかで支えているのだなあ、と感じました。

広田さんの、学校は、外の広い世界に通じる長い廊下、という話もよくわかります。そこには「世界全体をある角度からコンパクトに縮約した文字や記号」があふれているわけで、中には「こんなこと覚えて何の役に立つのだろう？」と思うようなものもあるかもしれません。しかし、その中にいるときはそう感じていたものが、外の広い世界に出てみると、思いがけず自分の個性や価値観の一部を形作っていることに気づかされることがあります。学校とは、そこで過ごす日々とは、さまざまなものを一緒に吸収し、それらを組み合わせたり、ほどこいたりしながら、自分というものを作りあげていく時間なのでしょう。

自分が最終的に「学校」を卒業して 40 年近くが経ちますが、ときどきあの長かった廊下が無性に懐かしくなることがあります。将来の自分がイメージできなくて、ヒリヒリした焦りと不安を抱えながら、一方で不思議な高揚感と穏やかさも感じていた時代、あのとき経験した様々な青春体験、中にはもう記憶の中に埋もれてしまったような青春体験が、今も自分のどこかで息づいているのかもしれません。

「学校ってナンダ？」という問いは、あまりにも大きくて、この文章では自分が考えていることの、ほんの数%も書けなかったなあ、と今読み返して反省しています。参考にさせていただいた、広田さんとおたさんには、せっかくの著作を部分的に切り取って、つまみ食いのように扱ってしまったことをお詫びいたします。

現在、「学校」に通いながら日々を送っている君にとって、「学校」とはなんでしょうか。この文章が、そんな問いについて考えるきっかけとなってくれば幸いです。君は今、世界の縮約である文字や記号に埋もれた長い廊下を歩いています。いつの日か、広い外の世界で、自分をワクワクさせてくれる体験と出会うことを夢みながら。その過程で出会うさまざまな青春体験は、君の成長の糧となり、自己更新の機会となります。そして、もしも、その廊下の窓から、どうしてもなく君の心を震わせる「何か」が見えたとしたら、その景色をしっかりと目に焼き付けておくことを勧めます。それは、もしかしたら君の人生を変える「何か」かもしれないからです。(終)

注)おたとしまさ氏には、別に『不登校でも学べる』(集英社新書)という著作があります。ちなみに自分は未読です。

※「校長室だより」は、本校のHPにも掲載しています。バックナンバーを読みたい人は、HPの「学校案内」→「校長室だより」からどうぞ。